Wilfred R.Bion 研究（V）
—「不在の乳房」の“未来の影”—

祖父江　典人

Ⅰ、はじめに

Bion,W.R.は、1968年にそれまでのイギリスでの地位や名声を脱ぎ捨てるかのように、突如カリフォルニアに移住した。この突然の“出立”は、先稿（2007）にて筆者が触れたように、奇しくもBionが“認識論の極点”から“認識論の彼岸”へとくるりと向きを変えた“転向”と軌を一にしている。

この転向には、「認識論の限界への気づき」（Bléandonu, G. 1994）、「神学的頂点へのシフト」（Meltzer, D. 1981）など諸説（Lyth, O. 1980 ; Grotstein, J. S. 1981; Bion, F. 2000）あるところだが、筆者はそれらに加え前稿において、「不在の乳房」に対峙するための“PSポジションへの突入”の意図を示唆しておいた。すなわち、Bionの人生自体、さらには彼の精神分析自体を深いところで揺動してきた「不在の乳房」との最終決着をつけるためには、Meltzer, D.（1981）の指摘するように、名声を背負わされたロンドンの「水様状の環境」からカリフォルニアの「気体様の環境」へと環境コンテイナー自体を劇的に変化させる必要があったのではなかろうか？　カリフォルニアの軽やかな空気の中、名声や要職などのさまざまな“陰影”によって「痕跡もなく沈み込む」（Bion,W.R.1970）怖れなく、Bionは「不在の乳房」を巡るPSポジションの只中へと旅立った。

Bion研究最終稿となる本論においては、Bionのいわゆる【精神分析第四期】（「記憶なく欲望なく理解なく」）における業績を、とりわけ「不在の乳房」の頂点から眺望したい。そうすることで、最晩年のBionが到達したこころの淵源、「不在の乳房」の“運命”を見届けたいと考える。

Ⅱ、PSポジションへの突入“前夜”

1）「記憶なく欲望なく理解なく」

Bionは『変形』（1965）において、究極の現実Oや「Oになること」など、それまでの認識論の枠組みを超越した境地に踏み込んだ。それは、グリッドにおいて極限まで突き詰められた抽象化である「代数学的計算式」を遡行し、ベータ要素の始原に究極の現実Oの姿を追い求めんとする情動的思考実験と考えられた。Bionは、「Oになること」とは、幻覚や誇大妄想のPSポジションへの参入と違わぬ現実と考えていたように思われる（祖父江、2007）。

『変形』後まもなく著された論文「記憶と欲望に関する覚書」（1967）においてBionは、『変形』においては未だ不明瞭だった「Oになること」に必要不可欠な分析家の態度を説いている。すなわち、「あらゆるセッションにおいて、進化は生じる。暗黒や無限から何かが進化するのだ。この進化は、記憶と表面的には似ているかもしれない。しかし、一旦その進化が経験されたなら、決して記憶とは混同されないだろう」。その“進化”の醸造庫となるために分析家は「記憶と欲望」を捨てねばならない。なぜなら、記憶も欲望もこころを支配するので、進化が生じたときに観察されえなくしてしまうからだ。Bionは治癒への欲望すら増殖し、こころを飽和させるので許容してはならない、と論じている。

この「記憶と欲望」に「理解」を加えて、「記憶なく欲望なく理解なく」として、後期Bionのキャッチフレーズになった感のあるテーゼが著されたのが『注意と解釈』（1970）である。

「分析家は記憶・欲望・理解を停止することで、無限にならなければならない」（『注意と解釈』）

この著書では、前半部分の多くを分析家の「記憶なく欲望なく理解なく」のこころの状態を作り出す必要性について割いている。その語りは、「患者の治癒や幸福ないしは患者の未来に対する欲望が心に浮かぶことを許容することによって、分析の仕事は妨害される。このような欲望は分析家の分析能力を侵食し、彼の直観の悪化を進行させる結果となる」、さらには「欲望する習慣が育つことを許してはならない」など、次第にアジテーションに似て語調を強めていく。

これほどまでにして、記憶と欲望と理解を斥ける積極的な訓練を自らに課し、Bionが目指した分析的境地とは何であろうか？　それが、「究極の現実Oになること」なのである。

「物質的・非物質的を問わずいかなる対象もその中に、不可知の究極的現実、すなわち『物自体』が存在する」（同上書）

しかも、Bionはこの究極の現実Oと妄想分裂ポジションの世界とをほとんど等位に置いている。

「自分が知っていることにしがみつこうとする試みは、妄想分裂ポジションに類比される心的な状態を達成するために、抵抗されなければならない」、「患者の幻覚と一体となり、それによってO→Kの変形を果たすことができる」（以上、同上書）

Bionは、「記憶なく欲望なく理解なく」のこころの状態を自らに課すことによって、妄想分裂ポジションの世界へと突入し、その懐深く入り込み、「Oにおける変形」を果たそうとしているのである。この思考が、グリッドまでに見られたような「不在」の象徴化・抽象化という抑うつ的痕跡を引き摺っていないのは明瞭だろう。むしろBionは「不在」「無限」そのものに“becoming”しようとしているのだ。さらに、そのために必要とされる分析家のツールとして、Bionは「直観」を用意した。

「便宜上私は、身体医が用いる『見る』『触れる』『嗅ぐ』『聞く』に精神分析家の領域で匹敵するものとして、『直観する』という語を用いることにしたい」（同上書）

Bionは、「直観」の例として、患者の日常的現実としては結婚しているが、精神分析的には結婚していないという事実を聞き分けようとするような態度だと示唆している。すなわち、心的現実は五感ではなくこころを空にした「直観」によってしか聞き取れない類のものなのだ。なお、ビオン的「直観」の実際は、次項以降で詳述されるBionのセミナー、レクチャー、さらには彼の精神分析的フィクションである『未来の回想』（1991）において、その例はこと欠かない。

他にもBionは『注意と解釈』の中で、「信念の行為」「忍耐」「安心」「達成の言語」などの概念をふんだんに用意している。ただ、筆者の見るところ、これ

らの概念は「記憶なく欲望なく理解なく」のこころの状態において、「直観」を機能させたことに伴う副次的産物であり、あくまでも基本テーゼとして不可欠なのは、前者の分析家の心的態度になろう。

ここでひとつの挿話を示そう。Grotstein, J.（2000）によると、Bionは分析の間、「理解」という考えをほとんど放棄し、Grotsteinが一度そのことばを使ったときには、「どうして君はoverstandやcircumstandと言わないのか」と言ったとのことである。Bionは彼一流のウィットに富んだコメントで、「理解」という用語を撹乱しようとしている。さらに、その後Bionは、「あなたの連想と私の解釈は痛みの真実に接近できていない。それは決して知ることのできない何かだ」と付け加えたという。Bionは、「理解」という次元では、「痛みの真実」という究極の現実Oには到達できないと言っているのだろう。

さて、このようなBionの精神分析的リスニングは、Freudが提唱した「平等に漂う注意」に新たな次元を付け加えた。Green, A.（1973）は、それを次のように論じている。『注意と解釈』には、そのタイトルで使われている「注意」という語すら記載されていないが、それはそもそもこの著作自体が「注意」だからだ。Freudの「注意」には予防的で受身的な含意があるのに対して、Bionの「注意」はもっと喚起的であり、未知に出会うために常ならぬこころの状態を創り出そうとするものである、と。それが、「記憶なく欲望なく理解なく」だ。このように分析家の心的態度を定式化したことが、『注意と解釈』の最大の貢献だとGreenは称揚する。

だが、このようなBionの“転向”後の思考の形に対して、もちろんGreenのように好意的な論調ばかりとは限らない。それとは逆の当惑や批判も、上記のようなBionのエニグマティックな言説に対しては沸き起こった。それがBionの「神秘化」問題である。

2）Bionと“神秘化”

『注意と解釈』に限らず、Bionの後期の著作に関しては、一部に不適切とか不真面目、よく言っても神秘的と論評されてきた向きがある（Bion Talamo, P. 1997, 2000a, b）。さらにはBion自身も、『未来の回想』のキャラクターの口を借

りて、自らがクレイジー、神秘家として揶揄されたり興味本位に見られてきたりしたことへの自覚をほのめかしている。

もっともBionが「不可解」「神秘的」と形容されることには、上記に述べてきたエニグマティックな言説以外にも、ゆえなしとはしない。なぜなら、『注意と解釈』の後半以降、Bionは実際に「神秘家」を登場させ、「体制」や「集団」に対位させた重要な役割を担わせているからである。すなわち、「神秘家」は、通常天才を連想させる稀有な特質を持ち、創造的でも破壊的でもありうる。さらに、その無尽蔵のマグマによって、既成の体制を壊し、新たな考えや意味をもたらす「直観」の具現者でもある。しかも、究極の現実Oに「もっとも近いところまで迫った人たち」なのである。Bionは、キリストやニュートンに「神秘家」のイメージを重ねている。

このような言表から、それらの天才のみならずBion自身にも神秘家のイメージが投影されたとしても無理からぬところであろう。その急先鋒としては、Symington, J. &N.(1996) を挙げることができる。

「神秘主義は科学的態度をとる人たちから軽蔑の目で見られがちである。神秘主義は本質的に、たとえ直接ではないとしても、究極的現実と近く接したと主張する人々の経験の記録である」、「そうした経験が可能となる通路は、他者との密接な関係を通してである。精神分析はそのような関係の検討であり、パートナーの双方を神秘的経験に開かそうとする」、「ビオンの考えは神秘的経験を促進する方向に進路を取った」

Meltzer, D.(1980) もBionにおける「神学的次元」を指摘している。しかし、それはもっと抑制された語り口であり、『変形』までの数学的パーテクスではまかないきれない新たな思想の創出の意図に力点が置かれている。

一方、このようなBionの“神秘化”傾向への指摘に対して、異論も少なくない。まず、Caper, R. (1998) は、Symington夫妻の著作に対して、国際精神分析誌上の書評において反論を加えている。彼が言うには、神秘家の考えは、新たな考えや心的状態に関する精神分析的経験からの抽象であり、精神分析を神秘主義に近づけようとするものではない、と。その証左としてCaperは、Bion自身がかつて直接彼に言った言葉を引き合いに出している。「無限の概念は、

自分が知らないことの程度を言ったまでである。それは人の一生ではひとつのことを知るだけでも十分な時間がないために不可知なのだ」と。

さらにSchermer, V. L.（2003）も、Bionが言いたいのは、宗教的・神秘的言明ではなく、記憶や欲望や理解では到達できない次元でのOからの変形であり、Bionが超自然現象の領域に乗り出したなどとは、彼の著作のどこにも記されていない、と論評を加えている。Williams, M. H.（1985）も、グリッドの抽象化では、経験の全伝達に後ろ向きの力が働くゆえに、文学的・芸術的形態を導入したのだろうと論じ、Bionの神秘化傾向には与していない。

では、Bion自身は、この問題に関してどのような立場を表明しているのだろうか。もとよりBionがそれに直接答える類の“コモン・センス”を示すことはあろうはずもないが、先のCaperとの対話のように、時々神秘化問題に関して参考となる発言を漏らしている。

たとえば、Segal, H.（1981）も、次のような例を挙げている。彼女は、Bionの考えの変化について次のように尋ねたことがあるという。数年前にBionが語った言葉「精神分析の目的は経験によって学ぶことを可能とする心的装置の変化を生み出すことだ」について、今はどう考えるのか、と。Bionは微笑みながら答えた。「ご存知のようにそのことばは、虎を捕まえてかわいい子猫ちゃんというようなものだよ」。

Bion一流のわかりにくい返答だが、Segalが理解するには、Bionは自らの以前の仕事によってすら、自分自身を安寧やまどろみに任せてはいけない、と言っているように思われたという。すなわち、捕まえたと思った「虎」（精神分析の本質）は、気づいた時には、「かわいい子猫ちゃん」（精神分析の表皮）に過ぎなかったというように。

この延長上に、「記憶と欲望に関する覚書」（1967）でのBionの言葉を銘記する必要があろう。Bionは、「精神分析の観察や言語の使用は、感覚印象に基づいている」という定式から観点を変えたのかという問いに対して、「変えたのではなく進化したのだ」とかなり直接的に答えている。

これらBion自身の言表から、彼は、同じところに踏みとどまるのではなく、絶えず考えを進化させることに意味を見出し、その必然としてグリッドの抽象

化からの跳躍に向かった、と考えるべきであろう。ただ、その"跳躍"の圧倒的な力に私たちは置き去りにされてしまいがちなので、その後姿が神々しくも"神秘的"に見えてしまうのだろう。だが、Bionの意図するところは、あくまでも単に考えの「進化」なのだ。

さらに言えば、Bion自身は通常の意味では全く神秘的、宗教的な人ではなかった。そもそも『熟慮』(1992) の中では、「錯覚としての宗教」と言明しているし、墓碑銘には単に「消えた」と記されることを望むだけのリアリストでもあったからだ (Bion Talamo,P.2000a)。娘のParthenopeによれば、Bionにとって死は単なる終わりであり、特別な意味はないと考えていたようだという。これらの"証言"に、Bionの神秘的な性向を読みとる余地はない。

つまるところ、私たちは通俗的な神秘主義とBionの言う意味でのそれとを取り違えてはならないのだ。前者は、むしろ未知や不可知に耐えられないがための"嘘"や"偽り"の所産であり、Bion言うところの新たな考えの創出とはむしろ対極を成す営みなのである。Mason,A. (2000) も喝破するように、Bionの言辞は一見神秘的な喩えを弄しているように見えるが、「PSポジションのこころに近い状態で、忍耐強く多くの観点が現れるのを待つこと」に向けられている。Bionが言いたいのは、宗教的・神秘的言明ではなく、記憶や欲望や理解では到達できない次元での「Oにおける変形」なのである。それが何度も言うが"PSポジションへの突入"と等値されているのだ。

その実際はまずはBionのセミナーやレクチャーの中に示される。

Ⅲ、PSポジションへの突入：Bionのレクチャーとセミナー

Bionは、すでに論じたように、イギリスのしがらみから離れ、カリフォルニアの軽やかな気候の中、それまでの抽象的思考の究極を追い詰めるような直線的・収斂的思索から、まるで自由連想のような跳躍的・拡散的な思索の旅へと飛び立った。そのために、「記憶なく欲望なく理解なく」や「直観」などの思考装置を準備万端整えたのだ。

Bionの思索は、ある意味要約されたり解説されたりすることを拒んでいる。なぜなら、意味の集約は、新たな意味の創出を阻む「体制」と化し、"思考や情

動の死”を招きかねないからだ。したがって、私たちはBionの語りに耳を傾けながら、その不可解さ、不可知さからくる意味の「空白」「無知」に耐えねばならない。その「無知」は「時期尚早の早まった答え」によって埋められてはならないのだ。

さて、筆者は、次に３つの観点からBionのレクチャーやセミナーの思索を追っていくが、もとを辿ればこれも、内的なBion像と「対話」することを通しての筆者自身の“自由連想”に過ぎない。いたずらに「空白」を埋めるだけの「早まった答え」に与することのないよう願わんばかりである。

なお、近年この時代のBionのセミナーやレクチャーに関しては、『イタリアンセミナー』（2005）や『タヴィストックセミナー』（2005）など、陸続と出版されているが、筆者が主に拠り所としたのは、老舗的なポジションに位置する『ビオンとの対話』（1994）や『ビオンの臨床セミナー』（1994）であることをお断わりしたい。

１）PSポジションへの突入：情緒の撹乱から空白へ

「ふたつのパーソナリティが出会うとき、そこに情緒の嵐が生まれます」（『思わしくない仕事に最善を尽くすこと』）。

Bionは、情緒の嵐や撹乱の圧倒的パワーについて、高らかに語り始める。Bionの語りに従うと、情緒の嵐というものは単に「おはよう」「こんばんは」という単なる日常的挨拶においてすら生じうるものだ、と。その先をもう少し見てみよう。

「撹乱に何が起こっているのか。なぜそれがその時出現してくるのか。かわいい少女に話し掛けているはずなのに、若い女性であるとわかるのはなぜなのか。それもあなたがたが彼女に話し掛けている間に。あなたがたが、責任のないかわいい男の子に話し掛けているはずなのに、彼が実際もうすでに若い父親になっているのはなぜなのか、といったことです」（『対話２』『ビオンとの対話』）。

Bionはここで何を言っているのだろうか？　この禅問答のような語りには、何が含意されているのだろうか？　「答え」は性急に導き出されてはならない

が、私にはこう思える。

「おはよう」「こんばんは」といった単なる挨拶、あるいは単なる「かわいい少女」「かわいい男の子」は、単にそれだけのことばの記号であり意味なのか、という問いかけである。それらのことばは私たちのこころに「おはよう」という文字通りの意味だけでは終わらない情緒の波紋を引き起こす場合もあるし、さらには単なるかわいい少女があたかも私たちに若い女性と違わぬ情緒的攪乱を及ぼすこともあるではないか、と。

私たちのこころは、私たちの気づかぬところで多重チャンネルのように同時にコミュニケートされているかもしれないのである。Bionは私たちのこころの多重性、多層性、多義性、多チャンネル性にまずは誘おうとしている。その多重なメッセージをキャッチするためには、私たちにはあるこころの構えが必要とされる。それが、「できるだけ真っ白に近いこころでセッションを始めようとすること」なのであり、「できるだけ先入観や理論などをぬぐい去ったこころの枠組みに何とかして到達し、戻ろうとし」なければならない、という構えである。これらの箴言とも受け取れるメッセージに、先の「記憶なく欲望なく理解なく」の姿を見て取ることも可能だろう。

こうして私たちには多重なメッセージをキャッチするこころの準備が整えられた。“挨拶”や“少女”“少年”というような既成の枠組みでこころを飽和させていたのでは、その向こう側から訪れる別の情動的メッセージを“受信”することはできない。

Bionは「対話１」において、発表者の提出したケースに対してコメントを加えているが、そのやりとりの中で、この点はより明瞭に示されている。そのケースは、複数の男性に性欲を抱いているし、不倫もしているので自分が「売女」ではないかと、とても不安になっている。発表者やフロアーに対して、Bionは投げかける。「なぜ売女ではいけないのでしょうか。あるいは、売春婦ではいけないのでしょうか。そうでないと何が困るのでしょうか。彼女は、売春婦あるいは売女と呼ばれたがっているのでしょうか」。ひどく直接的なこの返答に対して、質問者は「さて、あなたは何を言いたいのですか」と答えに窮してしまう。Bionは、それに対して、その患者には「思考の自由を制限したいとい

う願望があるということなのです」と言って、ひとまずやり取りを終えている[注1)]。

Symington, N.（1983）は同じこの件を引用し、これを読んだとき、彼自身が強迫的にコントロールされていた患者との面接を思い出し、それによって、そのコントロールから内的自由さを確保できるようになった自らの体験を論じている。すなわち、Symingtonは、Bionのコメントである「思考の自由を制限したいという願望」は、患者が分析家に加えたいコントロールであり、その結果分析家は、患者のことを「売女」と考える思考の自由を失ってしまう。その無意識のコミュニケーションを分析家は意識化することによって、患者との間での思考や関係性の自由を取り戻すこともできるのだ、と。Symingtonは、そのような内的自由さが確保される営みに関して、「X現象」と命名した。

さて、筆者にはそれに関連して、ここではさらなる意味を汲み取ることができるように思われる。まず、患者は自分の思考の自由にも制限を加えたいのだ。自分のこころとのコミュニケート自体をも制限したがっている。自らのことを「売女」と考えることは、情緒の攪乱をもたらす仕業となるかもしれない。その結果さまざまな自己の諸部分が呼び覚まされるかもしれない。患者はそれを怖れているのだ。自らのこころの闇から湧出する「売女」のような得体のしれない情動を制限するために、分析家の思考をもコントロールしようとする。

さらに言えば、Bionは、「売女」には、患者の怖れるような軽蔑的意味ばかりでなく、別の情動的メッセージが含まれている可能性にも、目を見開こうとしているのかもしれない。「売女」の奥に、多層構造からなる情動的意味を掘り起こそうとしているように思われるのだ。

たとえば、Bionは「フロイトからの引用について」（1976b）において、「ブラッディ・カント」というイギリスの俗語を取り上げている。それはことばの字義通りの意味では、「血まみれのヴァギナ」という生理学用語や解剖学的用語となるが、誰もそのような意味で使うわけではなく、日常的には「くされマンコ」のような罵りことばとして使用される。ここからさらにBionは、その「ブラッディ・カント」にはさらに別の情動的意味も発見できるかもしれない、と連想を膨らませる。すなわち、「ブラッディ・カント」は「By Our Lady」の短

縮した発音形ではないか、少なくともその発音が隠されているのではないか、というのである。そうなると、「ブラッディ・カント」には「By Our Lady」、すなわち「聖母マリアによる」も含意されることになる。

その真偽はともかく、Bionがここで目を向けようとしているのは、ことばの水準の多層性、あるいは蒼古性である。「ブラッディ・カント」には字義通りの意味から、通俗的な意味、さらにそれを遡れば“神聖な意味”まで埋もれているかもしれないのである。「売女」でも同じことであろう。Bionは蒼古性の中に、必ずしもネガティブな意味の再生ばかりを考えていたわけではない。「売女」にしろ、それは通常使用される売春婦という意味ばかりでなく、さらに蒼古的で、しかも新鮮な意味の創出の可能性が隠されているかもしれないのだ。そのためには、私たちは、こころを「空白」にしなくてはならない。情緒の攪乱された向こう側からもたらされる、新たな意味の創出を阻んではならないのだ。

Bionの新たなこころの創造に向けた蒼古性への回帰に関しては、項を改めて論じるとしよう。

2）胎生期への遡及とこころの蒼古性

「外科医がいわゆる『気管裂』と呼んでいるえらの痕跡があるなら、つまり、私たちの発達において、実際に魚の祖先や両性動物の祖先などの諸段階を通過しているなら、私たちのこころにおいてもそうでないはずはありません」

「『副視床』恐怖を考えてみるのは有用です。それによって、情緒のなかには『概念化』あるいは意識化、あるいは言語化と呼ばれるような地点にまで至っていないものがあるということを言っているのです」

「胎児が『見たり』『聞いたり』できるのはいつなのでしょうか」（以上、「対話3」）

Bionは誕生のセズーラ[注2)]の向こう側に、こころの痕跡や蒼古的要素が残存しているのではないか、と思いを馳せている。先の「ブラッディ・カント」と同じく、Bionの眼差しの向かう先はこころの深部に注がれている。

「誰かが『この人は、幻覚を起こしている、妄想を持っている』と言うので

す。しかしそれは、大人が狂っているとか神経症的だとみなしているある種の見たり聞いたりできる能力の名残かもしれないのです」（「対話３」）

Bionは、これに関連して、さらにこころには「根本的な現実」、「事実」というのがあるのではないかと投げかける。その根本的事実は、「幻覚」を幻覚と診断していたのでは、到達できない彼方に放擲してしまうことになる。そのPS的思考の中にこそ、よくはわからないものの「名残の能力」の“可能性”[注3)]を感受する必要があるのだ。

感受された先に、私たちはどのような意味の発見に出会うのだろうか？　それは、無垢な少年の目に映った世界やPSポジションにおける精神病者の世界と違わない。

「精神分析、精神医学、医学全体を含む私たちの理論というのは、空にいるひばりが『飛びあがることも降りることもできなくてキーキー泣き叫んでいるスズメ』であると信じていることと本質的には異なっていない、空間を満たそうとする努力の産物の一種なのです」（「情緒の攪乱」）

少年の無垢な目からすれば、ひばりは中空で困って泣き叫んでいるすずめにしか見えなく、決して中空で長時間鳴き声美しくさえずる習性を持つ鳥とは見なされない。Bionは、後者が精神分析理論と同じく“正当な理論”だが、少年の“無垢な理論”も、“事実ではない”と一蹴できるのだろうか、と投げかけているように思われる。さらに、BionはこのSegal,H.（1957）の「象徴等価物」理論にも振り向ける。

「精神病者は次のように言えるでしょう。かわいそうな奴。奴はブラームスのバイオリン協奏曲だと思っている。典型的な正気の見方だ。もちろんまったく違っている。でも奴は不幸なことに正気なんだ」（「思わしくない仕事に最善を尽くすこと」）

ブラームスのバイオリン協奏曲を弾いているソリストは、公衆の面前でマスターベーションしている、とみなす精神病者の思考をSegalは「象徴等価物」と命名した。その理論を受け、Bionは、精神病者の見方は「どんな点で、不正確な観点なのでしょうか」と疑問を投げかけているのである。このことばが、精神病者の妄想への安易な肩入れではなく、「名残の能力」の可能性としての「根

本的事実」に向けて発せられていることは、言うまでもないところだろう。

さらに、その蒼古的なこころの名残にもっとも出会われる機会のひとつに「分析状況」がある。私たちは、そこでさまざまなこころやこころの断片、さらには蒼古的思考に思いがけなくも遭遇する。しかも、それは必ずしもクライエントの側からもたらされるばかりではなく、私たち臨床家のこころの深部からもやってくる。Bionが語らんとするところをまとめれば次のようになろう。

「分析状況の中で生まれ出てくる『赤ちゃん』の相貌を、ビオンはさまざまに形容しています。『潜在的な母』『羨望に満ちた父』『痛ましい子ども』。あるいは解放されるのを望んでいる『性的人物』。内部に死んだ父や母を含んだ『死んだミイラ』、母親の幽霊としての『胃の痛み』。私たちが死んでしまおうとまるで頓着しない『存在への衝迫』」（「訳者まえがき」『ビオンの臨床セミナー』）

Bionは分析空間の中には何人の“赤ん坊”が生まれ出ると考えているだろうか？　私たちは、その中でこそ、もっとも多くの蒼古的で原始的な“子ども”と出会う機会を得るのである。そのためには、私たちは他者や自己との蒼古的部分との「コミュニケーション」を“正しく”図らねばならない。胎生期の思考に出会うためには、「体制」の壁や「セズーラ」の溝を突破せねばならないし、「『イギリス製の麻酔』を使って、『痛みのない分析』を受けようとしたり、あるいはある種の『広告代理業者』になって、自分を偽装したりしてはいけない」（同上書）のである。

Bionは、ここで根本的な意味の創出を整える「コミュニケーション」の問題にも光を当てようとしている。

3）蒼古的コミュニケーションと「自分自身になること」

「中枢神経、副交感神経、末梢神経装置の研究に多くの力が注がれました。けれども私たちは、あるとしたら腺系による思考のコミュニケーションや思考の予知での役割を考えてきませんでした。肺結核はいわば下肢のリンパ管とコミュニケートされているので、おそらく同様に、私たちが大脳領と関連づけるのに馴染んでいる思考は、交感神経や副交感神経にコミュニケートされるし、またその逆の場合もありえましょう」（「思わしくない仕事に最善を尽くすこ

と」)

Bionの意味するこころの蒼古的コミュニケーションとは、言語、非言語の領野に留まらず、身体や蒼古的身体性ともいえるβ要素の境域にまで及んでいる。なぜなら、結核菌は血管やリンパ管を通じ全身にコミュニケートされるし、思考も交感神経や副交感神経という身体通路を確保し、神経伝達物質という“非－心”、β要素というマインドレスな領野と関係を持っている。このように実際私たちのコミュニケーションは、計り知れない境域にまで及んでいる。

しかもこの“計り知れなさ”は、上記のような私たちの“経験の彼岸”の世界ばかりでなく、私たちの日常の中にも厳然として存在しているのだ。

「道徳的な衝動というのは並外れて原初的です。子どもを見つめて『ああ』と非難の口調で言いさえすれば、言葉を知る前の、あるいは知る前と思える子どもはやましそうにたじろぎます」(「対話１」)

「ああ」というたった一言で、子どもたちが、しかもことばさえ知らない子どもたちが、どんなにたじろいだりすることがあるのか、私たちは経験の内側のこととして知っている。もとよりここでBionは、ことばの非言語的コミュニケーションに言い及んでいるが、それとともにその非言語性の蒼古性にも焦点を当てているのだ。すなわち、「良心」や」「超自我」の原始性である。そのことをBionは、「超自我」はその名の示すような「上位」に位置するのではなくて、「あらゆる基本的で根本的なものの下に位置していることだってありうるのです」という言い回しで、私たちの常識を“撹乱”しようとしている。

このようにBionは、私たちの経験の内側に潜む、蒼古的で非言語的なコミュニケーションにも光を照射し、さまざまなビネットを散りばめていく。そのひとつを挙げれば、Bionが外科インターンのときの指導教授であった、Wilfred Trotterの皮膚移植手術の例がある。Trotterが皮膚移植をするときにはうまくいくのに、地方では名医とされる医師が手術したときには、専門的な技量は万全でも、その皮膚は剥がれたり拒否反応を起こしたりしてうまくいかない。これも技術を越えた「目には見えないある種のコミュニケーション」が働いている所産だとBionは印象づけていく。

この「目には見えないある種のコミュニケーション」は、他ならぬ分析状況

において、もっともよく経験されるものでもある。Bionは、彼自身の痛ましい経験を「証拠」(1976c) にて挙げている。その分析は極めてうまく進んでいた。けれども、ある時Bionは、その分析には「何も起こってはいない」と考え始めるようになった。あるセッションの後、患者は家に帰り、自分の部屋の隙間を徹底的に塞ぎ、ガス栓をひねって死んだ。「分析は私にはまったくうまく進んでいたのですが、結果はまさにこころを打ち砕くものでした。まさに何が失敗だったのか、私自身が見つけだし、知ることはまったくできませんでした。ただ、疑いもなくその分析が失敗していたという事実を除いては」。

たとえ「技量は万全」であったとしても、患者のこころの“皮膚”は剥がれてしまう。不可知の、知ることのできない「目には見えない」コミュニケーション、あるいはコミュニケーションの障害によって、こころ打ち砕かれる結末がもたらされたのだ。

他にもBionは、分析状況で生じる原始的コミュニケーションについて、断片的ではあるがさまざまに言及している。「洗練され、教養があり、はっきり話せる個人と原初的なこころとの間では交流が起こりうるのです」、「あなたに知られたくないと私が思っている私についての何かまで、あなたに知られてしまうであろうという覚悟も必ず含んでいるのです」(以上、「対話１」)、「私の解釈は、患者がどういう人間であるかということよりも、私がどういう人間であるかについて、ずっと多く彼に伝えるでしょう」(「対話２」) 等々。

Bionは洗練されたこころやことばの背後からもたらされる非言語的で原始的な「コミュニケーション」に最大限の敬意を払っているのだ。Ogden, T. H. (2007) は別の言い回しでそれを指摘している。「ビオンにとっての解釈とは、『対話』の一部であり、無意識の意識化をもたらす言語的象徴ではない」。「対話」すなわち「コミュニケーション」を図るものとしてのBionのことばの使用にOgdenは着目している。それが、単なる意識化や知識・技量の向上とは異なった、Bion言うところの“becoming”にも繋がる営みなのだろう。

さて、「コミュニケーション」を図るには、もとよりひとりではできない。それがBionの次の発言に端的に示されている。

「なぜ人は、ある種の精神的、あるいは肉体的助産婦の介入なくして、直接自

分自身との関係を持つことができないのでしょうか。それはあたかも、私たちの言うことが理解できるようになる前に、それを照らし返せる何かを必要として、それでわたしたちはもうひとりの人物に『あてる』ことができる必要があるかのようです」（「対話３」）

「生物学的に人のユニットはカップルであると言うこともできるでしょう。ひとつを作るのには、二人の人間が要るのです」（「サンパウロ 1978」）。

「もうひとりの人物」「カップル」、それは必ずしも具体的他者に限定されない。自己のパーソナリティの諸部分、蒼古的パーソナリティからの「照らし返し」、すなわち“自己との対話”も含まれよう。そして、分析状況においては、それは「分析的性交」を意味する。私たちは、そこからさまざまな「赤ん坊」が生まれ出るのを予感する。

「神経症や精神病などの集塊に埋もれた分析状況のどこかで、生まれ出ようと闘っている人がいます」「この患者は潜在的には母親なのです。しかし、そのことはすっかり隠れています」（「ブラジリア」）。すなわち、この患者は、すでに「潜在的には母親」なのに、それはすっかり隠れてしまい、生まれ出ることができない。しかし、その母親が「すでに母親」である自己部分を内包していることは、生まれ出る前から、すでに確かなことなのである。それは、「考える人のいない考え」と同じく、すでにそこに“ある”ものだ。そして、私たちはそれに“becoming”し、生まれ出ねばならない[注4)]。

こうして私たちは、自己や他者の諸部分との蒼古的なコミュニケーション、そこから生まれ出る「赤ん坊」によって、ようやく“自己自身になること”という権利を手に入れる。その先には、未だ広大な原野が待ち受けていようが、私たちには「ふたりは出会ったのですから、そしてこの情緒の嵐は起こったのですから、その嵐の当事者ふたりは『思わしくない仕事に最善を尽くす』よう決心することなのでしょう」。

Ⅳ、「未来の回想」：「不在の乳房」の“運命”

Bionがこころの蒼古性との「対話」や「コミュニケーション」にこころ砕いてきたことは、すでに見てきたとおりである。それにしても、こうまでして蒼

古的な部分との対話を図ろうとするBionの熱意の所在はどこにあるのだろうか？　そんな疑問が浮かんできたとしても不思議ではない。確かにそれには分析状況という臨床からの要請もあったことだろう。だが、そこにBionの熱意の所在を完全には還元できないだろう。筆者は、すでに何度も述べてきたように、その背後にBionの幼少期から連綿と続いた「不在の乳房」の“陰影”を重ね見ずにはいられない。

本項では、“PSポジション突入”への劇化である精神分析小説『未来の回想』を通して、Bionと「不在の乳房」との“運命”の行方を追ってみたい。

1）『未来の回想』と「不在の乳房」

「精神分析自体は虎の皮の縞模様に過ぎない。精神分析は最終的には、虎に出会うかもしれない。すなわち、物自体のOに」（第一部『夢』）

Bionの分身のひとりである「マイセルフ」は、これまた同じく分身のひとり「ビオン」との精神分析談義の中でこう漏らした。この小説が、「縞模様」という表皮ではなく、その中身である「虎＝物自体」に出会おうとしていることは、このせりふからも明らかだろう。

Bionは、人生の終わりに向けて600頁を優に超える大作をものし、レクチャーやセミナーにおいて実践してきた「情緒の撹乱」から「蒼古的こころ」への遡及を劇化した手法にて表現しようとした。したがって、この小説はその本性上要約や解説を拒むものだが、Bionの「不在の乳房」の行方に迫るために、ここでひとわたり概観しておきたい。

本書は、三部構成から成っている。もともと第一部『夢』は1975年、第二部『姿を現した過去』は1977年、第三部『忘却の曙』はBion没年の1979年に出版された。さらに1981年に「『未来の回想』へのキー」が妻のFrancescaの編纂のもと上梓された。それらが一冊に纏められ、1991年にKarnac Booksから『未来の回想』の総タイトルの下、出版されるという経緯を辿ったのだ。

それにしても、80歳を越える老人が、その最後の年までこのような荒唐無稽にも見える小説に並々ならぬ熱意を傾けていたことに、正直驚きを禁じえない。通常なら人生の完成や総括に向けて収束してしかるべき終着間際におい

て、Bionはそれとは全く逆に「精神の萌芽」に向かって遡行しようとしたのだ。精神の硬直化とは全く無縁の真の“神秘家”のなせる業であろう。

『未来の回想』は全編演劇仕立てであり、さまざまなキャラクターが登場しては消え、それらのせりふの応酬によって構成されている。ただし、通常の劇とは違い、ストーリーの一貫性はない、というよりむしろそれは避けられ、不連続な会話が神出鬼没のごとくに繰り返される。その内容は、恋愛の泥沼劇であったり、精神分析や哲学談義であったり、戦争論議であったり、幼児期や青年期の幻影の出没であったり、社会的常識の転倒のテーマであったり、さまざまだが、全編通じてBionが日常や現実の向こう側に存在する「物自体」にアクセスしようとする意図は読み取れる。そのために、この小説はあえて論理立てや一貫性を避けられ、まさに夢の中の出来事のように脈絡なく描かれているのだ。

したがって、登場人物も夢の中のキャラクターと同じように、「アリス」や「ローズマリー」などの人名以外に、「ステゴザウルス」や「タイラノザウルス」などの恐竜、「ヴォイス」や「ゴースト」などの非現実の人物、「ビオン」「P.A.（精神分析家）」「マイセルフ」「エムーマチュアー」「プリーマチュアー」などのさまざまな分身、「21歳」「22歳」などの年齢そのもの、「シャーロック・ホームズ」や「ワトソン」などの小説のキャラクター、「ソクラテス」などの哲学者、Bionの戦友と思しき「アーサー」などの人物が縦横無尽に脈絡なく出没する。

しかも、これらさまざまなキャラクターは、しばしば眠りに陥り「私は夢を見ていた」と、場面の転換ポイントで述べたりする。このせりふは、それまで語られてきた話が夢の中の出来事であった可能性を示唆している。「眠り」が舞台装置として多用されているのだ。その大掛かりな例が、主人公のひとりの「アリス」に見られる。彼女は第二部の最初で、「私は夢を見ていたに違いない」と言う。そのことばは第一部の『夢』すべてが、アリスの夢の中の出来事であった可能性を暗示させる。さらに、第二部の終わりでもアリスは眠りに陥るところで終わり、第三部がアリスの夢の中の出来事の可能性である含みを残している。

このようにBionは、あえて夢劇場の演出を採用しているように思われるが、

それには明確な意図が込められている。なぜなら、Ogden, T. H.（2003, 2004b）も論じるように、Bionはα機能の最深層に「夢－仕事α」の水準を想定し、無意識的な夢思考にプライマリーな価値を見出そうとしているからである。「S-状態（睡眠状態）に対するW-状態（覚醒状態）の優位性を誰があるいは何が決めるのでしょうか」（「思わしくない仕事に最善を尽くすこと」）なのである。このようにBionは夢水準での思考こそ、無意識への“王道”と考えているのだ。したがって、“夢劇場”はBionの取るべき道の必然でもあった。

第一部『夢』では、プロローグで上記の意図が明示的に述べられている。「これは、人工的に構成された夢を含む、精神分析に関する虚構的説明である」。その宣言どおり、物語はアリスが「インドの女帝になっていた奇妙な夢」から醒めたところから始まる。だが、醒めたはずのアリスには、すぐにふたたび眠りに陥っていくような展開が待ちかまえている。

まず、物語は女主人アリスとその夫であるローランド、メイドのローズマリーとその愛人であるトムとの愛憎劇を中心に展開される。アリスは美しく教養があるが、若くて野生的なエネルギーに満ちたローズマリーに嫉妬の炎をたぎらせている。それゆえアリスは、ことさら専制的な主従関係をローズマリーに強いろうとするが、もう一方ではローランドとの夫婦関係の退屈さに辟易としている。しかし、アリスは嫉妬のあまりローズマリーとトムを解雇してしまう。ローランドが優秀な使用人であった彼らを惜しみ呼び戻したところから、物語は混迷の度を深め、ストーリー性の殻が突破される。すなわち、状況は姿の見えない敵がやってくる予期的不安に満たされ、その雰囲気の中でローズマリーは、アリスの横暴にさらされながら、図らずも彼女ともみあって倒れこむ。そこから起きあがったアリスは「新しいアリス」となり、かわいらしく従順な女性に生まれ変わる。そして、ローズマリーとの主従関係も逆転し、アリスがメイドの立場になるのだ。そして、「あなたは誰ですか？」という問いかけが、アリス、ローズマリー、ローランド、ロビンなどの間でたびたび繰り返されている。

ここまでの展開の中で、Bionは、私たちのアイデンティティの根底を問い、その喪失からくるあからさまな不安状況に私たちを生身で曝そうとしているよ

うだ。すなわち、PSポジションの世界に私たちを誘っている。したがって、この夢物語は、次第に不安で攻撃的な色調を濃くしていく。すなわち、突然見知らぬ男がふたりやってきて、アリスとローランドの持ち物をチェックしたり、その夜ローズマリーとローランドがベッドインしたり、なぞのトラックの男たちが無生物を扱うごとく女たちを裸にしクリーニングしたり、突然ローランドがドイツ兵に襲われたりなど、とにかく不可解さと得体の知れない不安な状況が、不連続ですばやい場面の切り替えとともに繰り広げられる。そして、遂には「アルフ（Arf）」や「スモールMo」などのBionの幼児期の幻影を思わせるキャラクターの登場となるのだ。その中で「ヴォイス」は叫ぶ。「私たちは彼の夢の一部に過ぎない。私たちをリアルと思ってはいけない」。

これらの演劇仕立ての夢物語が、「意味の制限によって歪められていないコミュニケーションの形態」（Bléandonu, G. 1994）の提示であり、その目的は、アリスとローズマリーの関係性に端的に見て取れるように、人生における冒涜、闘い、生存、性愛などの原初的で根源的なこころの深部への突入にあると言っても、過言ではないだろう。Bionは、セミナーやレクチャーにおいて実践してきたことばによる情緒的撹乱を、今度はより具象的な「夢思考」によって、さらなる展開を図ったのだ。本書のイタリア語への翻訳者でもある娘のBion Talamo P.（1997）が言うように、この著作は「可能な限り読者を喚起的にし、読者に自分自身の情動を直面させ、こころの深部で情動を育てること」に開かれていよう。それは後に述べるように、読者ばかりでなくBion自身のこころの探求にも向かっていようが。

このように第一部『夢』は、まずは日常的“常識”“文法”“論理”を解体、転覆したところからもたらせる「情緒の撹乱」、すなわちPSポジション現出の役割を担っていた。先に見てきたようにBionは、PSポジション世界と胎児のこころの世界を等位に置き、新たな「赤ん坊」が生まれることを待ち望んでいるのだ。その下準備を整えたところで次の第二部が用意されている。

第二部『姿を現した過去』は、第一部以上に演劇仕立ての舞台設定となっており、「場面は消える」などのシナリオ風のト書きも使用されている。だが、ひとまず情緒の転覆の状況は落ち着き、その代わりキャラクターによる延々とし

たせりふの応酬が繰り広げられていく。そうした舞台設定を支えに、次第に“姿を現してくる”のが、Bion自身の痛ましい「不在の乳房」の傷跡だ。その頂点に第一次世界大戦での瀕死体験が位置しているのは、すでに論じてきたところである。「私は死んだ。1918年8月8日に」（『長い週末』）。

この第二部において、この痛ましい傷跡は、随所に顔を覗かせる。それは『夢』において企てられた「情緒の攪乱」の所産でもある。それによって、「恐竜」や「戦車」に象徴される硬い殻の向こうに閉じ込められていた心的外傷の断面が、生々しい傷とともにふたたびこの世に現れ出ようとしているのだ。その“傷”は、薄明かりの中で時々点滅する人影のごとく浮かんでは消える。

「ロビン」は言う。「私は人生の最も良い年月に死を怖れた。ひとりの青年のように勇敢ではなかったことを恥ずかしく感じる。彼は動かなくなった戦車から這い出たとき、投降するように求められたが拒否して撃たれた」

「P.A.」は言う。「私はことばの中でもっとも悲しいことばを使う。『私はそれが起こるとは思わなかった』1918年8月8日。そのことばは愚かで野暮な衣装のように私のこころの傷の裂け目にまとわりつく」

「P.A.」は言う。「私はそこで死んだ。魂は死んだけれども、身体は永遠に生き続ける」

これらキャラクターの口をついて出る戦争記憶の断片は、言うまでもなくBion個人のそれにまっすぐに繋がっていよう。投降することを拒否して死んだ勇敢な青年は、Bionより一歳下の若い将校アーサーである[注5)]。さらに、「－Kの日は、1918年8月7日と8日だ」（『夢』）であり、Bionはその日に「魂は死んだ」を経験したのだ。キャラクター「ポール」は、それに対して「宗教的観点では身体は死んでも魂は永遠に続く」と反論するが、Bionは戦車隊全滅という「不在の乳房」の極限では、ある意味身体の死よりも恐ろしい、―Kしか生み出すことのできない「魂の死」に見舞われてしまうことを、これらキャラクターの口を借りて表現しているのである。したがって、『未来の回想』を自伝的なオリエンテーションを帯びた小説と位置づけることに対して慎重な意見のある一方（Colombier, J. P. 2003）、多くの論者がこの著作をBion自身の戦争で失われたこころの側面との再生の試みや自己探求として位置づけているのは、極めて正

当なことであろう（Williams, M. H. 1983, 1985, Lyth, O. 1980, Bion, F. 1995、Lopez-Corvo, R. E. 2003）。

この後、「ドゥー」[注6]が「私は過去の未来だ。来るべきものの形」と言って登場し、ローランドに将校としての過去の回想を迫る。それに対してローランドは、「誰が私の悪夢を買うのだろうか」と応酬していく。このあたりのやりとりが、Bléandonu, G（1994）のように、ドゥーはBionの無意識の最深層の表象であり、ローランド、P.A.、ロビンなどで表象されるキャラクターはBionの意識的な分身を表しているのだろう。ドゥーは過去に新たな未来を告げる予兆とともに消えていき、その通りの展開が「過去」とのパーティとして繰り広げられていくのだ。

その後第二部は、ローズマリーとマンの結婚式のあたりから次第に速度を速め、さまざまなゴーストが登場し、終わりに向けて混迷の度を深めながらなだれ込んでいく。マンは「これは結婚ではない、騒動だ」と言う。ローズマリーは、「過去の時間のパーティだ」と叫ぶ。P. A.は「女性は出産時に死ぬ可能性のあることを知っているので、男性より死を怖れたとしてももっともだ」と語る。これら一連のせりふの交換では、Bionの最初の妻Bettyの死や戦争で死んだ若者たちなど、過去からのゴーストとの対峙が暗示されている。すべてのゴーストはこう主張する。「身体は死んだが魂は永遠に生き続けるだろう」。

これは先の「魂は死んだけれども、身体は永遠に生き続ける」のアンチテーゼになっており、Bionは、ここでゴーストたちの魂の蘇生を探っていこうとしているのだ。すなわち、ゴーストという「不在の乳房」をーKの淵に放擲したままにしておくのではなくて、そのーKのPS心性に“becoming”し、新たな意味の創出を目論もうとするのだ。だが、それが容易ならざる試みであることは言うまでもない。アーサーのゴーストは、P. A. に問う。「私たちは勝ったのか？」。その答えは長い沈黙を持ってしか迎えることはできない。戦争体験の意味の創出には、さらなる苦難が待たれねばならないのだ。

第三部『忘却の曙』は、「エムーマチュアー」の“解説”を借りれば、「精神の萌芽の試みであり、早まった知識、経験、栄光、自己陶酔、自己満足によって圧倒される誕生から死までの旅路に関して、胎生ー科学的に説明しようとし

たものである」。

Bionは、あらたな意味の創出に向けて、なお一層「精神の萌芽」に向かって遡及した。したがって、この第三部は「20ヶ月」「24ヶ月」「20歳」「30歳」などの年齢そのもの、「ボディ」や「マインド」などの心身表象、「ソーマイト（体節）」「ティプス（頚骨）」などの身体構造の一部分、さらには「エムーマチュアー」や「プリーナータル」、「サイケ（精神）」や「ソーマ（体細胞）」などの誕生前の部分対象なども新たな配役として登場してくる。そうすることで、Bionは誕生というゼズーラの向こう側、体細胞の世界までこころの旅路を企てようとしている。Bionは存在の根源にまでどこまでも迫ろうとしているのだ。

だが、存在の根源に近づけば近づくほど、そこには「サイケ」と「ソーマ」のような分裂した部分対象が純然たる姿で生息しており、しかもその間にはお互いが共存するにはあまりにもギャップの深いセズーラが歴然として横たわっている。したがって、その根源への接近は、異質なもの同士の葛藤、対決、危機を通してしか果たされない類のものでもあるのだ。

「ボディ」:「あなたのこころ、そんなものは全く何の証拠もない」

「マインド」:「ばかなことは言わないで。私はあなたが痛みを感じると同じく不安を感じるのです。しかもあなたが何も知らない痛みも私は持っている」

「ボディ」と「マインド」は、なかなかお互いの存在価値を認め合うことができない。

これらのセズーラは、「プリーナータル（誕生前）」と「ポストーナータル（誕生後）」のこころの間にも、大きく口を広げている。「ビオン」は語る。

「潜在的に才能のある胎児のこころと、分離しているが同じく才能のある誕生後の自己との間に生じるものと想像されてきた悲惨な邂逅は、ふたつかそれ以上の個々のグループが出会うときにも生じることだ。フランス人とイギリス人、ドイツ人とブリテン人、そして今では黒人と白人との関係性の歴史は、相互の利益になる刺激ではなくて、相互破滅に終わるように思われる」。

これらの断裂へのBionの鋭い感性、その断裂がもたらす危険に対するツノザメやサバのような「長距離知覚」（「フロイトからの引用」）が、Bion個人の「不在の乳房」体験に根を張っていることは、すでに何度も見てきたところだ。「不

在」とは結局のところ、異質なもの同士の邂逅によって生まれるギャップやセズーラ、それがもたらすーKという所産に他ならない。Bionは、「グリッド」までの年代において、それを抑うつポジションの最果てまで追い詰め、抽象化、象徴化の“儀式”によって弔おうとしたが、結局象徴化の次元では成仏しきれない「不在の乳房」（虎＝物自体）に晩年になって出会ってしまった。その“虎”の頂点に位置するのが、「魂は死んだけれども、身体は永遠に生き続ける」—Kの日にあることは言うまでもない。Bionは、『忘却の曙』において、自伝にも書き残さなかったような戦争体験の細部や心情を生々しくも「P.A.」に語らせている。

「P. A.」:「よろしい、始めましょう。私は21歳のときどんな気持ちだったかを覚えています。私たちは戦列を整えるよう命令されていた。私は恐ろしかった。私にはまったく先が見通せなかった。私たちは、敵をひとり残らずにしろと命令された。その命令の実行によって、今や敵は打ちのめされ敵の戦隊は引き裂かれ、私たちは８月８日に勝利した。不幸なことに私は勇敢だともてはやされた。だが、21歳は知っていた。私は恐ろしさのあまり医者に行って傷病兵として扱われる勇気もなかったことを。＜略＞『仲間がやられた！』、小さなドイツ兵が私の方に走りながら叫んだ。彼の尻は倒れまいとしているので怖ろしいばかりにくねくねと動いていた。ぞっとするほど関節の外れた年老いた英国兵には、私は地獄——『S.B.』のやってくる——に行くように命じた。だが、身の毛のよだつ小さなドイツ兵には、私を彼の小さな穴倉に引っ張っていかせた。どんな軍規もない。彼が私を殺すのはわかっていた。その暗闇の中でもうひとりのドイツ兵が、彼の脚をスカーフのように首の周りに巻いていた。『やられた？』。彼は私に触るように引っ張った。『やられた？』。『そうだ、やられてる』私は答えた。彼はわっと泣き出した。私はこころの中で思った。『忌々しい——もう出て行け』。その時はじめて私は態度を急変させ、穴から出て、外に出た。そういう場で私が携帯するように教えられていたスミス・アンド・ウェッソンを持って来ようと外に出たのだ」。

痛ましいばかりの戦争体験の吐露である。目を背けたくなるほどの悲惨さだ！　だが、Bionはここでははっきりと自己のこころの生々しい傷を正視しよ

うとした。戦争体験のセズーラの向こう側にある痛みは、もはやゴーストたちによって示されるのではなく、Bion自身の肉声「P.A.」によって語られるに至ったのである。ここで、Bionの凍りついた体験、戦車に表象される硬い殻の向こう側への通路がつながり、「忘却の曙」がもたらされたのだ。

もっとも、私たちの人生において、このような「不在の乳房」の“戦争”は至るところに口を広げている、とBionは言おうとしているようにも思われる。それは必ずしも戦争体験のような極限状況には限らないのである。魂と誕生後、少年期の成長過程、潜伏期から思春期、セックスをめぐる葛藤、思考と行動、神秘家と常識的道徳等、私たちの社会や成長過程には容易には架橋することのできない“断裂”は歴然として存在しているのだ。Bion自身、幼少期から、世界との違和感というスキゾイド的体験様式で、世界とのセズーラを否応なく経験してきたことは、すでに何度も述べてきたところである。

その断裂から産み落とされた「不在の乳房」を象徴レベルで昇華するのではなく、PS体験の懐深く入り込み、その－Kの極限から新たな意味の再生、創出を図ろうとすれば、「神秘家」コペルニクスが「地球が回っている」と言ったような「カタストロフィック・チェンジ」を引き起こすかもしれない。そのチェンジとは「大惨事という感じを関係者に与えるという意味でカタストロフィックであり、唐突でほとんど身体的暴力に近いという意味でもカタストロフィック」（『変形』）なのである。すなわち、新たな意味の創造としての誕生と恐るべき危険とは表裏一体の関係にある。だが、Bionはそれをこの小説において実行しようとした。その先にどんな地平が開けているのか、次に見ていきたい。

2）Bionと「不在の乳房」の“未来の影”

Bionは戦争体験によって、－Kという「魂の死」を経験した。それは彼の「不在の乳房」の“頂点”に位置していた。そこから新たな意味を創出するために、Bionは「グリッド」という抽象化を捨て、胎生期のこころやPSポジション的世界の中に、その可能性を求めていった。そして、遂に硬い殻で蔽われていた戦争体験は、セズーラが突破され、生々しい傷とともに蘇り、「忘却の曙」がもたらされたのだ。

その後第三部においては、「P. A.」を軸にし、「プリースト」「ロビン」「ローズマリー」「アリス」などから成る「ポスト・ナータル小委員会」が形成され、思考の「生殖細胞」を増殖・拡散させ、次第に訓練されていく途につく。すなわち、「忘却の曙」から未来に向かっての思考の可能性が、過去の中に「未来の影」を見る方式で模索されていくのだ。

たとえば、「サイケ」と「ソーマ」の断裂は、「サイケ」が痛みに受容的になり、「ソーマ」が騒音に対してばかりでなく、ことばの意味に受容的になる段階で対話を確立できるようになっていく。そして、「もしそれが商工会議所の注意を引いたなら、有名なビジネスチャンスになるかもしれない」と、新たな思考誕生の可能性が予感される。さらに、「アリス」と「ローズマリー」の溝も、「アリス」が「ブラッディ・カント」のような品位を落とされたことばに耳を傾けるようになり、逆に「ローズマリー」が“プリーズ”のような丁寧語を口にし自らを律しようとすることによって、魂再生の可能性が探られていく。

このように彼らの思考の「生殖細胞」は、カタストロフに対する柔軟性を獲得するにつれ、思考過程を比喩的に表現できるようになり、思考誕生に直面できる準備を整えていく。したがって、炎の戦車から飛び出した将校は、戦車という防衛的で自己欺瞞の核でもある鎧を突破した魂の蘇生、新たな思考獲得のメタファーともなっている（Williams, M. H. 1983）。すなわち、「ポスト・ナータル小委員会」は、現在において過去を経験し、「未来の影を過去に落とす」ことのできる『未来の回想』グループとして成長したのだ。その意味するところは、過去の中にこそ未来の扉を開くことのできる、新たな思考誕生の鍵が隠されている、ということであろう。

だがBionは、その「未来の影」に明確な形を与えなかった。『忘却の曙』は、まさに“曙”に達したが、未来は不確かなままだ。小説最後は次のように締めくくられる。

「P. A.」:「人類が識別力においてエキスパートになることを学ばなければ、人類は間違った選択の危険に差し迫られるでしょう」

「アリス」:「たとえば、核戦争」

「P. A.」:「選択に貼られるどんなラベルもありません。叡智の成長にはどんな

代わりもないのです。叡智か忘却か――あなたの選択です。その戦争からは、どんな解放もありません」

Bionは、人生最後に人類の未来に思いを馳せている。それは、彼の最後の論文「思わしくない仕事に最善を尽くすこと」が、「この戦争はまだ終わっていないのです」のフレーズで閉じられていることと、正確に符合している。

さらに、この抑うつのトーンと重なるように、『未来の回想』エピローグには、「私は常識、理性などのどんな色合いによっても台無しにされていない本を書こうとしたが、今や失敗するに決まっていたように思う」とペシミスティックな感慨が漏らされている。

だが、私たちはこれらのペシミズムを額面どおりに受け取ってはならない。ここにはもうひとつのセズーラが暗示されているかもしれないからだ。この本の最後に向かうに連れBionは、P.Aなどのキャラクターを通して、生物学者が生殖細胞と名づけるところの知的対応物である「想像力という虚構」、さらには子宮の壁に接触して伝達される思考やコミュニケーションの「胚芽」や「波動」に、ことばを多く費やしていく。これは、Williams, M. H.（1983）も指摘するように、思考自体の独立した存在が比喩的な現実性を帯びてきた印のようにも見える。すなわち、Bionは、これら思考の「胚芽」に未来を託そうとしているように思われるのだ。

幼少期から連綿と続いた「不在の乳房」との“戦争”は、ここに至ってPS心性を突破し、胎生期のこころまで遡及した。そこでBionは、「忘却の曙」としての生々しい傷跡とそこから生成する思考の「生殖細胞」「胚芽」に出会ったのだ。

先に挙げた一見ペシミスティックなBion最後のことばの裏には、このように未来に託された途方もない可能性を見ているところがあるのだ。Bionは、「不在」「絶望」「－K」からの魂の再生に「信念の行為」を傾注しているのだ。なんとなれば、燃えさかる炎の戦車からはいでた死の淵にすら、Bionは新たな意味の誕生を目指したのだから。「負（不在）からの蘇生」――それが、私たちに投げかけられているBionの“遺言”ではないだろうか。その仕事は“負”が魔女狩りのごとく忌み嫌われる現代において、私たちに委ねられている仕事でも

あるのだ。

V、終わりに

Bionは、妻Francescaの言（1981）によると、「生きているときと同じように勇敢に死んでいった」とのことである。また、Bionは死とは単に「消える」ことだと考えていたという証言もある（Bion Talamo P.2000a）。誕生前の世界にあれほどの可能性を探ろうとしたBionにしては、死後の世界への関心はあまりに淡白であり、まったくのリアリストでもある。

だが、筆者にはそれもBionらしさのひとつに数えられるように思われる。なぜなら、Bionは終生「不在の乳房」と格闘し、晩年にはそこに未来に繋がる新たな思考の可能性を探求したが、そもそもBionの取り組んだ「不在」とは、剥奪や喪失の結果もたらされた“痕”であったり、「体制」の壁や「セズーラ」の断裂によって見えなくされている“未知”であったりするからだ。すなわち、「不在」とは、“あったところになくなったもの”、あるいは“あるところに見出されないもの”を指し、そもそも「何もない＝不在すらない」を意味していないのである。

Bionにとって、「死」とは「消えた」、すなわち「何もない」を意味していたのだろう。そこに筆者は、Bionの真髄を見る。世の中には「不在」と「何もない」があるのだ。Bionはそこを峻別していた。だからこそ私たちは、あるはずの「この世」において、「不在」の“可能性”を蘇らせねばならない。本当に「何もない」が訪れる前に。

注１）このようなBionの語り口の特徴に関しては、Meltzer,D.（1980,1981）やOgden,H.（2007）もそれぞれ別の角度から論評している。

Meltzerは、Bionの没年にセミナーに参加したとのことだが、その時のBionの受け答えは、実際のところ軍事的戦略のようだったという。すなわち、Bionはダイレクトな質問を浴びせかけられると、まるでその攻撃的な意図から退却するかのように、質問とはまったく反対の方向から話しを切り出し、質問自体を一蹴する。それがMeltzer自身の質問であった時ですら、彼はBionの語りの道筋を見失い、質問を半ば忘れ、怒りと共に取り残された。それはまるで、敵を側面からでさえなく、背後から捕らえようとする戦略のようだったという。Meltzerは、Bionの語り方ややりとりにレジオン・ドヌール賞を受賞した卓越した軍人の面

影を見ている。

Ogdenは、筆者と同じくその語り口の直接性を感じ取っている。彼が言うには、そのようなビオン・スタイルは、経験を利用できる非精神病的部分、さらには無意識にダイレクトに働きかけようとせんがためである。ただし、Bionはセミナー・メンバーの防衛を最大限に尊重し、Bionの言葉を利用できるこころの準備が整ったところでそれを供給しているので、徒にメンバーを辱めるようなことは避けられている、と。すなわち、Ogdenが考えるには、Bionはセミナーにおいても、精神分析における解釈と同じように、自らの発言をメンバーの無意識や非精神病的部分に向けて発している。

筆者はそれらに加え、ここではBionの語りにおけるこころの多層性・多チャンネル性への働きかけの意図を論じている。

注2） セズーラとは、もともとは「中間休止」とも訳される、音楽での楽節中の切れ目や詩の行での区切れを差す用語だが、Freud, S. はそれを「制止、症状、不安」(1926) の中で、誕生行為に関連させて取り上げた。すなわち、Freudは、誕生行為というセズーラによって子宮内生活と最早期の乳児期は分かたれるが、そのふたつの時期には私たちが考えるよりもはるかに連続性があるのだと説く。Freudは、その連続性を母親側の養育上の視点から論じたが、Bionは、子どもの側の心的生活の連続性の視点からそれを論じようとする。すなわち、子どもには、誕生前の子宮内生活の時点から、すでにこころやこころの雛形のようなものがあるのではないか、と言うのである。

注3） 筆者はここで“可能性”ということばをあえて付加し、「名残の能力」に対する留保をつけた。なぜなら、注意しなければならないが、Bionも決して「名残の能力」がある、と断定してはいないからである。もし断定すれば、それは「早まった答え」と化し、Bionの通俗的“神秘化”に手を貸すことになろう。Bionは、自らの思考や発言に関しても、常に留保付きの、すなわち可能性への道筋を拓くというプロセス重視の思考を展開していることを忘れてはならない。

さらに、Bionがここでいう「事実」とは、「幻覚」という精神医学的「診断」を事実ではない、と必ずしも除外しているわけではないことにも留意しなければならない。Bionは「事実」という範囲をとても多層的・多義的に捉えているように思われる。ただ、そのような診断が下されてしまうとその奥にある情動的メッセージを塞ぐセズーラを刻んでしまうので、診断の持つ「体制」の意味に注意を喚起しているのだ。蒼古性や原始性ほど真実に近いという話しになれば、それは原始で未知なものほど貴く、すべての事象はその“不可知”から説明し尽くされるという巷間の神秘主義と同じ教条主義の過ちを辿ることになろう。Bionのそもそも指摘したいのはこころの多面性、多チャンネル性であり、必ずしもことばやこころの原始的側面の方にプライマリーな価値を見出しているわけではない。従来見過ごされがちだった蒼古性への可能性に向かって視野を広げ、挑戦しようとしていると見るべきだろう。

注4）Bionは他との「コミュニケーション」や「分析的性交」の結果、生まれ出ずる「赤ん坊」として、先に述べたような「羨望に満ちた父」、「死んだミイラ」、「胃の痛み」などのネガティブな対象に限っているわけではない。その「赤ん坊」が「潜在的な母親」であったり「潜在的な医者」であったりというポジティブな未来への可能性にも開かれているのに注意せねばならない。

さらに、蒼古的なコミュニケーションによって、蒼古的な胎児のこころが蘇るだけでなく、その結合は、新たな思考誕生の可能性にも開かれている。それが次に述べる『未来の回想』において目論まれた「胎生－科学的」試みの重要なモチーフのひとつだ。

注５）Bléandonu,G（1994）も指摘しているが、この青年将校は自伝『長い週末』の中では、Asserと表記されている。しかし、『未来の回想』では、Auserとなっている。それが単なる筆のすべりなのかどうかはわからないが、両著作においてアーサーが投降を拒否して撃たれた将校と記述されていることからして、同一人物であることは疑い得ない。

注６）「ドゥー」はDuと表記されており、これはドイツ語で親しい間柄で使われる「あなた」を意味する二人称である。

参考文献

Bion, F.(1981): 'Memorial meeting for Dr Wilfred Bion' The International Review of Psychoanalysis8,3-5

Bion, F.(1995): 'The days of our years' Journal of Melanie Klein and Object relations13（1）

Bion, F.(2000): 'Random reflections on Bion:past, present, and future' In :Bion Talamo, P. et al.(2000) W. R. Bion Between Past and Future. Karnac Books

Bion Talamo, P.（1997）: 'The clinical relevance of a Memoir of the Future' Journal of Melanie Klein and Object relations15(2), 235-241

Bion Talamo, P. etc (2000a): 'Introduction' In:Bion Talamo. P. et al. (2000) W. R. Bion Between Past and Future. Karnac Books

Bion Talamo, P.(2000b): 'Laying low and saying(almost)nothing' In:Bion Talamo.P.et al.(2000) W.R.Bion Between Past and Future. Karnac Books

Bion,W.R.(1965): Transformations. Reprinted(1984), Karnac Books, In : Bion,W. R.(1977): Seven Servants.Jason Aronson,福本修、平井正三訳(2002):「変形」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局

Bion,W. R.(1967): 'Notes on memory and desire' In : Bion,W. R.（1992）: Cogitations. Karnac Books

Bion,W. R.(1970): Attention and Interpretation.Reprinted（1984）, Karnac Books, In:Bion,W. R.（1977）: Seven Servants.Jason Aronson,福本修、平井正三訳（2002）:「注意と解釈」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局

Bion, W. R.(1976a): 'Emotional turbulence' In: Bion,W.R.（1994）: Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳（1998）:「情緒の攪乱」『ビオンとの対話――そして、最後の四つの論文』金剛出版

Bion, W. R.(1976b): 'On a quotation from Freud' In: Bion,W.R.（1994）: Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳（1998）:「フロイトからの引用について」『ビオンとの対話――そして、最後の四つの論文』金剛出版

Bion, W. R.(1976c): 'Evidence' In: Bion,W.R.(1994): Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳(1998):「証拠」『ビオンとの対話――そして、最後の四つの論文』金剛出版

Bion, W. R.(1979): 'Making the best of a bad job' In: Bion, W. R.(1994): Clinical Seminars and

Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳 (1998):「思わしくない仕事に最善を尽くすこと」「ビオンとの対話——そして、最後の四つの論文」金剛出版

Bion, W. R.(1982): The Long Week-End 1897-1919 : Part of a Life. Reprinted(1991), Karnac Books

Bion, W. R. (1991) : A Memoir of the Future. Karnac Books

Bion, W. R.(1992): Cogitations. Karnac Books

Bion, W. R.(1994): Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳 (1998)「ビオンとの対話——そして、最後の四つの論文」金剛出版, 松木邦裕、祖父江典人訳 (2000)「ビオンの臨床セミナー」金剛出版

Bion,W. R.(2005): The Italian Seminars. Karnac Books

Bion,W. R.(2005): The Tavistock Seminars. Karnac Books

Bléandonu, G(1994): Wilfred Bion:His Life and Works 1897-1979. Free Association Books

Caper, R.(1998): 'Books Reviews: The Clinical Thinking of Wilfred BIon. By Joan & Neville Symington' The International Journal of Psychoanalysis79, 417 – 420

Colombier, J. P. (2003) : 'So you want to write a fugue? Wilfred R. Bion with Glen Gould' In : Lipgar, R. M. and Pines, M.(ed.) (2003) :Building on Bion:Branches. Jessica Kingsley Publishers Ltd

Cortinas, L. P.(2003): 'Transcending the Caesura : The road towards insight-from experiences in Groups to Memoir of the Future' In : Lipgar, R. M. and Pines, M.(ed.) (2003):Building on Bion: Branches. Jessica Kingsley Publishers Ltd

Freud,S.(1926): 'Inhibition, symptoms and anxiety' In:Standard Edition, vol.20, Hogarth Press, 井村恒郎、小此木啓吾訳 (1970):「制止、症状、不安」、井村恒郎、小此木啓吾他訳 (1970)「フロイト著作集 6」人文書院

Green, A.(1973) : 'On negative capability: a critical review of W. R. Bion's Attention and Interpretation' The International Journal of Psychoanalysis54, 115-119

Grotstein, J. S.(1981): ' Wilfred R. Bion: The Man, The Psychoanalyst, The Mystic. A Perspective on His Life and Work'In : Grotstein, J. S.(Ed) (1981) Do I Dare Disturb the Universe? Reprinted(1986), Karnac Books

Grotstein, J. S. (2000) : 'Bion's "transformations in 'O'" and the concept of the "transcendent position"' In:Talamo, P. B., Borgogno, F. & Merciai, S. A.(ed.) (2000): W. R. Bion : Between Past and Future. Karnac Books

Grotstein, J. S.(2003): 'Introduction : Bion, the navigator of the deep and formless infinite: overview' In :Lipgar, R. M. and Pines, M.(ed.) (2003) : Building on Bion: Branches. Jessica Kingsley Publishers Ltd

Lopez-Corvo, R. E.(2003): The Work of W. R. Bion. Karnac Books

Lyth,O.(1980): 'Obituary Wilfred Ruprecht Bion(1897-1979)' The International Journal of Psychoanalysis 61, 269-273

Mason, A.(2000): 'Bion and binocular vision' The International Journal of Psychoanalysis 81,983-989

Meltzer, D.(1980) : '"The diameter of the circle" in Wilfred Bion's work' In:Meltzer,D. (1994)

: Sincerity and Other Works; Collected Papers of Donald Meltzer. Karnac Books
Meltzer, D.(1981): 'Memorial meeting for Dr Wilfred Bion' The International Review of Psychoanalysis8, 11-13
Ogden. T. H.(2003): 'On not being able to dream' The International Journal of Psychoanalysis 84, 17－30
Ogden, T. H.(2004a): 'An introduction to the reading of Bion' The International Journal of Psychoanalysis 85, 285－300
Ogden, T. H.(2004b): 'On holding and containing, being and dreaming' The International Journal of Psychoanalysis 85, 1349－1364
Ogden, T. H.(2007): 'Elements of analytic style:Bion's clinical seminars' The International Journal of Psychoanalysis 88,1185－1200
Schermer, V. L. (2003) : 'Building on "O" :Bion and epistemology' In : Lipgar, R. M. and Pines, M.(ed.) (2003) : Building on Bion:Roots,Jessica Kingsley Publishers Ltd
Segal, H.(1957): 'Notes on symbol formation' The International Journal of Psychanalysis38,391-397,松木邦裕訳（1988）:「象徴形成について」『クライン派の臨床』岩崎学術出版社
Segal, H.(1981): 'Memorial meeting for Dr Wilfred Bion' The International Review of Psychoanalysis8, 5 － 8
祖父江典人(2007):「Wilfred R. Bion研究(Ⅳ－2)――『不在の乳房』の抑うつ的極点とその出立――」愛知県立大学文学部論集（社会福祉学科編）第55号, 19－46
Symington, N.(1983): 'The analyst's act of freedom as agent of therapeutic change' The International Review of Psychoanalysis10, 283－291
Symington, J. & N.(1996): The Clinical Thinking of Wilfred Bion. Routledge, 森茂起訳（2003）『ビオン臨床入門』金剛出版
Williams, M. H.(1983): '"Underlying Patten"in Bion's Memoir of the Future' The International Review of Psychoanalysis10, 75-86
Williams, M. H.(1985): 'The Tiger and O' Free Associations1, 33-56